Rikkyo Psychological Research
1999, Vol. 42, 75-82

原　著

特性的自己効力感と自我心理学における自我発達の概念との関連

立教大学　森本昭子[1]

The relationship between generalized self-efficacy and the conception of ego development in ego psychology

Akiko Morimoto (Rikkyo University)

In recent years, the conception of generalized self-efficacy, which was proposed by Bandura(1977), has attracted the attention of researchers in clinical and educational fields. The content of generalized self-efficacy, however, is similar to the concept of ego development in ego psychology. Generalized self-efficacy and the conception of ego development in ego psychology have something in common. The purpose of this article is to review the relationship between generalized self-efficacy and the conception of ego development. First, generalized self-efficacy studies and related conception studies are described, then, the relationship between these concepts and the conception of epigenesis and ego-strength is examined. Second, the characteristics of generalized self-efficacy are pointed out. In conclusion, the future direction of generalized self-efficacy studies and ego development studies in ego psychology is described.

Key words : generalized self-efficacy, ego psychology, epigenesis, basic trait, ego-strength.

はじめに

自己効力感（self-efficacy：セルフ・エフィカシー）は近年，臨床や教育などの分野に大きな影響を与えつつある．社会的学習理論（Bandura, 1977）の中核をなす概念の１つで，Bandura (1977) が人間の行動の先行要因として予期機能（期待）を重視し，自己効力感の概念を提唱したのである．この概念の独自性は，所与の行動がある結果に至るであろうというその人の査定（結果期待）と，その結果に必要な行動を自らが成功裏に実行できるという確信（効力期待）とを区別した点にある．

Bandura (1977) は知覚された効力期待のことを自己効力感と呼んだ．ある行動に対する自己効力感が高ければ，その行動は効果的に遂行されるというもので，予期的不安は低減され，回避行動が消去され，課題に積極的に取り組み，困難な事態においても多くの努力を長期に渡って継続する．そのために自己効力理論は心理的適応と不適応において，また情緒と行動の問題にとっての効果的な介入において重要な役割を果たすと考えられている．それを証明している研究はあらゆる領域にわたって存在し，自己効力感が行動を予測する，あるいは自己効力感の変容が行動の変容に強く影響するということはすでに多くの人に認められつつある．

しかしこれまでに研究されてきているものの大部分は，Bandura (1977) が指摘している自己効力感の２つの水準のうちの一方のみ，つまり課題や場面に特異的に行動に影響を及ぼす自己効力感のみである．もう一方の水準は，具体的な個々の課題や場面に依存せずに，より長期的により一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感

[1] 本論文の執筆に当たりご指導いただきました立教大学大野久教授に深く感謝致します．

であり，自己効力感をある種の人格特性的な認知傾向とみなした特性的自己効力感(generalized self-efficacy, 以下GSEと記す)と呼ばれているものである．つまりGSEが高いということは，一般的に自己効力感を高く認知する傾向にあることを示しているのである．

これまでの研究は課題や場面に特異的に行動に影響を及ぼす自己効力感の高いことが多くのメリットをもたらすことを証明することに始終しており，一般的に自己効力感を高く認知するという人格特性的な認知傾向についての研究は少ない．例えば，Davis-Berman (1988) は高齢者 (平均年齢 70 歳)を対象に，GSEと身体的自己効力感，自己報告による身体的状況との関係を検討した．その結果，GSEが身体的自己効力感や自己報告による身体的状況よりも強く抑鬱得点を予測した．しかしDavis-Berman (1990) がリタイヤメントセンター居住者（平均年齢 81.1 歳）を対象に，GSE，身体的自己効力感と抑鬱との関連を調査した結果，抑鬱得点との相関はGSEと-0.40，身体的自己効力感と-0.50 となり，わずかにではあるが逆の結果となっている．また，Stuifbergen & Becker (1994)は身体に障害をもつ 117 名を対象に，健康促進行動の予測因について検討した．その結果，健康促進行動尺度はGSEよりも特定の健康促進行動についての自己効力感との相関の方が高かったのである．このようにGSEに関する研究はまだ始まったばかりであり，GSEが重要な概念であるという意識が定着しつつあるにもかかわらず，研究のはっきりとした方向性が見出せないのが現状である．

そこで現在，広く用いられつつあるGSE尺度についての研究を細かく検討していったところ，GSE研究が目指していることとHartmannやEriksonらに代表される自我心理学は近いところに位置づけられるのではないかと考えられたのである．自我心理学とは超自我やエスから独立した自律的自我 (autonomous ego)，すなわち葛藤から自由な自我の領域 (conflict-free ego sphere) を仮定し，自我の適応を強調するものである．GSEという人格特性的な認知傾向を扱う以上，やはり自我という概念が重要な役割を果たすのではないだろうか．このように考え，本稿ではGSE研究，自我心理学双方の研究の発展のために，その関連について検討する．

GSEやその類似概念における研究

統制期待理論，習得性無気力の学説，自己効力感の学説からの研究は，学校での成績，スポーツ活動，結婚の満足感，健康と病気からの回復，職業的な成功と満足，満足感の遅延，高齢での幸福感，社会的葛藤，失業への対処，抑うつなど，コントロール信念が人生のさまざまな種類の問題に適した予測変数であることを証明している．

統制期待理論 (Rotter, 1966) において，多くの生起可能な行動の中からどの行動が最も強い生起力をもつかは,「その行動が成果の強化をもたらすという当人の一般的な期待とその強化のもつ価値との相互作用で決まる」とされた．そして行動と結果の随伴性に関する一般的な信念に個人差が存在するとし，これを内的-外的統制信念と呼んだのである．内的-外的統制は，人格変数であるだけでなく状況変数でもあるが，状況の構造が明確であれば，人格変数としての内的-外的統制による行動の違いは見られにくく，状況が曖昧であれば人格変数による違いが表れることになる．Seligman (1975)も習得性無気力理論において随伴性を問題にし，行為と成果の間の随伴性が存在するか否かがコントロールと関係するとした．それに対してBandura (1977)は，その行動そのものが自分にできるかどうかという認知を重視し，自己効力感という概念を提唱したのであるが，やはりコントロールを問題にしているという意味では類似概念であると言える．

ここで人格特性を扱った研究を取り上げてみると，親子関係や養育態度との関連を検討した研究が多いことが分かる．例えば，内的統制への期待の強い，つまりコントロール感の強い子どもの親は愛情表出的，援助的，保護的，賞や承認を与える傾向が強い (Katkovsky & Crandall & Good,

1967)．子どもの独立心を促進するような母親の養育態度は子どものコントロール感を高めるのに有効である．(Chance, 1972; Wichern & Nowicki, 1976)．また，早期成人期のコントロール感の強い人は自分の子ども時代の両親の態度を，受容的で，かつ子どもと積極的に関わりを持とうとしていたと感じていた(Davis & Phares,1969)．幼少期に母親が権威的でない関わりをし，選択・裁量の自由が与えられていたというような養育態度は，早期成人期においてコントロール感が強い(Taler & Jalowiec, 1968)．そしてコントロール感の強い子どもの母親は，子どもがある課題に取り組んでいるとき，それを暖かく批判的ではない態度で見守ってはいたが，その課題を解決するためのアドバイスなどをすることは観察されなかった．この結果は，子どもが内的統制型へ発達するには，建設的な親との相互作用が重要であるということを示したものである(Roeb, 1975; Gordon & Nowicki & Wichern, 1981)．

まとめてみると，刺激的家庭環境を整え，子どもの行動に一貫して，また随伴的に反応し，子どもに自律性を与え，温かく支持的に対応する親は，子どものコントロール感をより強くさせる傾向があると言える．逆に刺激や反応が少なく，権威主義者で，子どもに対して介入的，過保護，拒否的あるいは無視する親は，子どものコントロール感をより弱くさせる傾向があると言える．

これらの研究は非常に興味深い結果を示しながらも，人格特性としての統制期待，コントロール感，自己効力感について各々を考察しようとすると，それらを明確に区別することの意味は薄れてしまう．なぜなら，統制期待は随伴性についての期待を強調し，自己効力感は効力についての期待を強調しているが，人格特性として捉えるときには，はっきりと線を引くことができないからである．またコントロール感については各研究において定義がまちまちであるが，総合すると，コントロール感とは随伴性についての期待と自己効力感とを含んでいると考えられるのである．

GSE研究と自我発達の概念との関連

先の親の養育態度と子どものコントロール感との関連についての研究は，Erikson (1959) の漸成発達理論図における自我の成長といった文脈で捉え直してみると非常におもしろい結果となっている．漸成発達理論図 (Erikson, 1959) は，それぞれの発達段階がより高次の段階に新たな意味合いを付与するとともに，より低次の，すでに発達し終わった段階にも新たな意味合いを付与することを示している．その中で「精神的活力の最も基本的な機能条件」，「誕生直後の経験から得られた，自己と世界とに向かう１つの包括的な態度」のことをErikson (1968) は基本的信頼感と呼び，第Ｉ段階の発達課題とした．「『信頼』とは，自分は自分自身を信頼できるのだという根本的な感覚，ならびに，他人も本質的には信頼してもよいのだという感覚を，意味するもの」である．さらにErikson (1964) は「内在的な固有の強さ」，「人格的強さ」を活力と呼び，漸成発達理論の８つの発達段階に対応させて，８つの活力を挙げている．第Ｉ段階（乳児期）である基本的信頼対不信の対立の中から活力として希望が獲得されるとしたのである．「希望とは，依存性がもたらす無政府的な衝動や激怒にもかかわらず，主要な願望は達成可能であるということを信じる永続的な先有傾向のこと」であるとErikson (1968) は定義しているのである．そして基本的信頼感や基本的信頼対不信の対立の中から現れる希望という活力を人生の出発点に置く理由は，新生児が母親やそれに準ずる他者とのやり取りの中で適度に首尾一貫した世界を与えられることによってそれらが得られると考えられるからである．

そもそも，人格特性としての統制期待，コントロール感，自己効力感とは何か，と考えていくと究極的には自我の問題に行きつくのではないだろうか．このことは何よりも先の養育態度の研究結果が示していると考えられる．刺激的家庭環境を整え，子どもの行動に一貫して，また随伴的に反応し，子どもに自律性を与え，温かく支持的に対

応することは，子どもが基本的信頼対不信の対立から基本的信頼感を獲得し，希望を得ることにつながるのである．その結果，子どもが内的統制型となり，コントロール感やGSEが高くなると考えることは，ある意味で自然なことであると言えよう．

GSE尺度と自我発達の概念との関連

GSE研究はまだ始まったばかりであるが，ここでは日本で使用されている代表的な2つの尺度を紹介し，自我心理学との関わりを検討する．

一方は臨床心理学的な観点から坂野・東條（1986）が作成した一般性セルフ・エフィカシー尺度であり，16項目からなっている．これは自己効力感が高く認知されたときの行動特徴と自己効力感が低く認知されたときの行動特徴をもとにMMPIおよびY-G性格検査の項目から選抜して作成されている．具体的に自己効力感が高く認知されたときの行動特徴には，社会的状況の中での克服努力が大きい，積極的に多大の努力を払おうとする，積極的に課題に取り組む，最終的な成功を期待する度合いが大きい，葛藤状況で長期的に耐えることができる，自己防衛的な行動が減少する，予期的な情動喚起の程度が緩和される，などが挙げられる．それに対して自己効力感が低く認知されたときの行動特徴には，無気力・無感動・無関心になる，あきらめが早い，失望し落胆する，自己卑下する，劣等感に陥りやすい，抑うつ状態に陥る，などが挙げられている．

このようにして作成された尺度を因子分析してみると，行動の積極性（例えば「結果の見通しがつかない仕事でも，積極的に取り組んでゆくほうだと思う．」），失敗に対する不安（「何かをするとき，うまくゆかないのではないかと不安になることが多い．」），能力の社会的位置づけ（「世の中に貢献できる力があると思う．」）という3つの因子が抽出された．

もう一方の尺度はSherer & Maddux & Mercandante & Prentice-Dunn & Rogers（1982）の作成した尺度を日本のコミュニティサンプルに適用した成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田（1995）の特性的自己効力感尺度であり，23項目からなっている．項目は社会的スキルや職業的能力の観点から作成され，行動を起こす意志，行動を完了しようと努力する意志，逆境における忍耐などから構成されている．具体的には「何かをしようと思ったら，すぐに取りかかる．」「初めはうまくいかない仕事でも，できるまでやり続ける．」「面白くないことをする時でも，それが終わるまで頑張る．」などが挙げられている．

このようにして詳しくGSE尺度作成の流れや内容を検討してみるとやはり，Erikson（1959）の漸成発達理論における第I段階の基本的信頼感やそこから生まれてくる活力である希望という概念に重なる．そこで第I段階も含め，それ以降の発達段階においての自我の成長を検討する上で重要となるのが，自我の強さという概念である．

自我の強さは治療上，実際に重要であるとされており，Hendrick（1934）は「自我の潜在能力」，「性格の強さ」という言葉で表現している．分かりやすく「困難と戦うある種の資質，『勇気』，『たちもどって』再度試みる能力」とも説明している．もっと専門的に言えば「フラストレーションや情緒的緊張に耐える資質および治療目標へ向かって働き続ける資質」（White, 1963）と表現される．また，Eysenck（1953）は人格特性の測定に関する非常に広範な研究の中で，一方の極を「神経症傾向」，他方の極を「意志力」として特徴づけられる基本的次元を繰り返し公表してきた．そしてさらにKassebaum & Couch & Slater（1959）はMMPIを因子分析した結果，それと全く同一の因子と思われるものを見出し，それに「自我の弱さ対自我の強さ」と名付けたのである．「自我の強さ」という因子の高得点者の特徴は，不安や精神病理の特徴がなく，リーダーシップや有効な知的能力を示す傾向にある．一方低得点者の特徴は，一般的不適応，不安，依存性，心的不調の傾向にある．これは先述のGSE尺度の高得点者・低得点者の特徴とほぼ同一であると考えられる．このことからGSEと自我の強さという概念が非常に近いところに位置づけられることが示唆され，GSEと自我

心理学における自我発達との関連は単なる直感によるものではないことが分かる．

ここで自我の強さの概念を，より具体的に説明する．どんな場合に自我が強いといえるのだろうか．Fenichel (1938) は「緊張または興奮に耐える能力」，「妥当な判断をし妨害に負けず意図を実行する能力」，「本能を統制し水路づける強さ」，「旧態依然とした超自我の現れを変える能力」，「自我自体の内部で葛藤する要素を調和させる能力」を持つときであるとしている．逆に自我の弱さとは，「本能エネルギーが封鎖され，その必然的な結果として自我が用いうるエネルギーが削減されることに関連している」(White, 1963) ということである．このように自我の強さの概念を詳細に検討していくと，やはりGSEの概念との関連が強いことが分かるのである．

また，Hartmann (1939) は自我の強さを理解するためには，危機的な状況やストレス状況の歴史以上のことを理解しなければならないと述べている．なぜなら葛藤のない状況で環境に対処していくことによって自我が学習したこともまた，葛藤場面においての有益な知識となるからである．これはBandura (1977) が自己効力感の情報源として，自分で実際に行ってみること (遂行行動)，他者の行為を観察すること (代理的経験)，自己教示や他者からの説得的な暗示 (言語的説得)，生理的な反応の変化を体験してみること (情動的喚起) というようにかなり網羅的に情報源を挙げていることに関連していると考えられる．

このようにGSEと自我心理学における自我発達の概念とは全く別の観点から人間にアプローチしており，用いている言葉も違っている．しかし，その内容を追求していくと非常に似ていることに気が付くのである．

GSEの変動

場面固有の自己効力感やGSEという概念が臨床場面や教育場面で用いられることが多いのは，自己効力感の変動可能性に注目しているからであると考えられる．しかし青年期以降に場面固有の自己効力感やGSEを本当の意味で上げることはできるのであろうか．

Jerusalem & Mittag (1995) はベルリンの壁崩壊による東ドイツからの移住者を対象に，GSEがストレスフルな人生移行によってどう影響されるかについて縦断的に検討した．その結果，GSEの高い移住者は，不安があまり強くなく，より健康的であり，身体の不調も少なかった．そしてGSEは比較的安定しており，移住のストレス，雇用の状態，ソーシャルサポートへの指標となるパートナーの有無によって影響を受けないことが分かったのである．自己に関する信念は思春期や青年期までに形づくられ，後の環境的な影響には左右されないのではないかとJerusalem & Mittag (1995) は考察している．

また，前田・原野 (1993) は，内潜的モデリングによる主張行動の形成に及ぼす自己効力感の効果を実験により検討した．前田らは短期大学の学生を対象として広告により，非主張的な学生を募集した．被験者はプレテスト1，2の終了後，無作為に2つの群のいづれかに割り当てられた．1つは，主張訓練の手続きが内潜的モデリングのみである実験条件，もう1つは内潜的モデリングに加え，行動リハーサルを行い，その行動リハーサルの反応に対して結果のフィードバック・正の強化などの言語的フィードバック情報が与えられ，積極的に自己効力感を高める実験条件である．そしてポストテストを行い，2週間後にフォローアップテストが行われた．各テストでは主張行動 (質問紙・行動リハーサルテストによる) と，主張行動に対する自己効力感が測定された．その結果，内潜的モデリングのみの主張訓練と内潜的モデリングと行動リハーサルを用いた主張訓練のいづれの手続きも，外顕的モデリングと同じように主張行動に対する自己効力感を高め，訓練終了後もその効果が維持されていることが明らかになった．そして自己効力感が高まると，それに従って主張行動も促進された．しかし積極的に自己効力感を高める実験条件によって，自己効力感を一層高めることはできたが，実際の行動遂行の上では有意な差は

認められなかった．

この2つの研究から，GSEは比較的安定したものであり劇的な変動はないと考えられる．そして場面固有の自己効力感というのは，特別な場合を除き，GSEによって規定されているのではないかということが示唆された．実験によって高められた場面固有の自己効力感は，実験状況という特別な状況では効果を発揮した．しかし，実際の主張行動をとるときに有意な差が認められないのは，主張行動に対する自己効力感が根本的にはGSEによって規定されいると考えることが妥当であることを示しているとも考えられる．

以上のことから，健康な人格を対象として場面固有の自己効力感を研究する際に，その変動可能性に重心を置き過ぎることには注意する必要がある．つまり仮に場面固有の自己効力感をひとつ上昇させたとしても，すべては比較的安定したGSEに強く影響されているため，現実的にはまた元に戻ってしまうであろうと考えられるからである．

場面固有の自己効力感に比べるとGSE研究はまだ圧倒的に少ない．しかしこれからは，どのような要因がGSEを決定づけるのかといった視点を持ち，自我心理学における自我発達の概念も導入しながらGSEについて検討していくことが望まれる．

ま と め

これまでGSEやその類似概念における研究，GSE研究と自我発達の概念との関連，GSE尺度と自我発達の概念との関連，GSEの変動について述べてきたが，これらを総合的に検討してみるとGSE研究も自我発達研究も最終的に目指しているところは同じであると考えられる．つまりGSEは健康な自我発達によって説明できるのではないだろうか．

一般的に自己効力感を高く認知する傾向という人格特性としての自己効力感を考える場合，必然的にErikson (1959) の漸成発達理論における自我の発達や自我の強さという概念が並べられる．なぜなら漸成発達理論の第Ⅰ段階の発達課題である基本的信頼感は，「自分は自分自身を信頼できるのだという根本的な感覚，ならびに，他人も本質的には信頼してもよいのだという感覚」(Erikson, 1968) であると定義されており，その活力である希望は，「依存性がもたらす無政府的な衝動や激怒にもかかわらず，主要な願望は達成可能であるということを信じる永続的な先有傾向」(Erikson, 1968) であると定義づけられているからである．そして「緊張または興奮に耐える能力」(Fenichel, 1938) である自我の強さもまた，自我の発達にとって重要な概念であり，本質的には基本的信頼感や希望に重なるものであると考えられる．これらはまさにGSE研究の方向性を示しているのではないだろうか．

そして漸成発達理論図 (Erikson, 1959) のそれぞれの発達段階がより高次の段階に新たな意味合いを付与し，より低次の，すでに発達し終わった段階にも新たな意味合いを付与していくように，GSEは形成され，定着し，青年期には人格特性として比較的安定するのだと考えることは極めて自然なことである．

以上のことを踏まえた上で，これからの展望を述べていきたい．大野 (1996) はas a whole (一人の人間) を分析単位とする研究への提言をしているが，これまでの文脈にこの分析単位という概念を導入して捉え直してみる．分析単位とは「分析対象とする事象の大きさ」のことであり，具体的には，①内容的に広い範囲に及ぶ内容か，範囲が絞られた狭い内容か，②時間的に長期にわたる事象か，短時間でおこる事象か，③質的な内容の事象か，量的に測定できる事象か，④主観的な内容をもつ資料か，比較的客観的に判断できる資料かという観点からの概念である．例えば質問紙法により，あらかじめ用意された項目に対して評定させるという方法を用いた場合，範囲は絞られており，短時間に起こる事象で，量的に測定でき，比較的客観的な資料に対する分析という意味で，分析単位の小さい研究であると言える．GSE研究に限らず，一般的に多くの研究は分析単位が小さい．予測の正確性を求められる分野の研究や厳密

な意味での変化を捉えようとする研究は，必然的に分析単位は小さくなる。しかしGSE研究は場面固有ではなく，人格特性という非常に大きく根本的な問題を扱っている．本当に知りたいことは人格という広く漠然とした問題なのである．そのため，今後は意識的に分析単位を大きくしていく必要があると考えられる．なぜなら，小さな分析単位による研究だけをいくら数多く積み上げても，実際の生き生きとした人間の姿はなかなか見えてこないからである．そして分析単位を大きくする際に，GSE研究が自我心理学から受ける影響は非常に有益であり，取り入れるべき概念も豊富であると言える．

しかし，ただ単に分析単位を大きくしても客観性や説得力に欠ける恐れがある．具体的に何を知りたいのかという分析視点をしっかりと持ち，分析単位の大小両方の観点から相互補完的にアプローチしていくことが大切である．そしてGSEのように人格特性を扱ってゆく研究においては特に，非Aと解釈するよりもAと解釈した方が真実に近いという蓋然性の論理（西平，1983）を積極的に取り入れていく必要がある．なぜなら先に述べたような分析単位の大きな研究を実際に行い，分析する際に蓋然性の論理は非常に大きな役割を果たすと考えられるからである．

引用文献

Bandura,A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review,* **84**, 191-215.

Chance,J.E. 1972 Academic correlates and meternal antecedents of children's belief in external or internal control of reinforcements. In J.B.Rotter, J.E.Chance, & E.J.Phares(Eds.), *Applications of a social learning theory of personality.* New York: Holt, Rinehart & Winston.

Davis,W.L., & Phares,E.J. 1969 Parental antecedents of internal-external control of reinforcement. *Psychological Reports,* **24**, 427-436.

Davis-Berman, J. 1988 Self-efficacy and depressive symptomatology in older adults: An exploratory study. *International Journal of Aging and Human Development,* **27**, 35-43.

Davis-Berman, J. 1990 Physical self-efficacy, perceived physical status, and depressive symptomatology in older adults. *Journal of Psychology,* **124**, 207-215.

エリクソンE.H. 小此木啓吾訳 1973 自我同一性 誠信書房
(Erikson,E.H. 1959 *Identity and Life Cycle:* Selected Papers. In Psychological Issues. Vol.1. New York: International Universities Press.)

エリクソンE.H. 鑪幹八郎訳 1971 洞察と責任 誠信書房
(Erikson,E.H. 1964 *Insight and responsibility.* New York: Norton.)

エリクソンE.H. 岩瀬庸理訳 1973 アイデンティティ 金沢文庫
(Erikson,E.H. 1968 *Identity-Youth and Crisis.* New York: Norton.)

Eysenck,H.J. 1953 *The Structure of Human Personality.* London: Methuen.

Fenichel,O. 1938 *Ego Strength and Ego Weakness.* Collected Papers, **2**, 70-80. New York: Norton.

Gordon,D., & Nowicki,S., & Wichern,F. 1981 Observed maternal and child behaviors in a dependency producing task as a function of children's locus of control orientation. *Merrill Palmer Quarterly,* **27**, 43-51.

ハルトマン,H. 霜田静志・篠崎忠男訳 自我の適応－自我心理学と適応の問題 誠信書房
(Hartmann,H. 1939 *Ego Psychology and the problem of Adaptation.* New York: International Universities Press.)

Hendrick,I. 1934 *Facts and theories of Psychoanalysis.* New York: Knopf.

Jerusalem,M., Mittag,W. 1995 Self-efficacy in

stressful life transitions. In A.Bandura(Ed.), *Self-efficacy in changing societies.* New York: Cambridge University Press pp. 177-201.

Kassebaum,G.G., & Couch,A.S., & Slater,P.E. 1959 The Factorial Dimensions of the MMPI. *J.Consult.Psychol,* **23**, 226-236.

Katkovsky,W., & Crandall,V., & Good,S. 1967 Parental antecedents of children's beliefs in internal-external control of reinforcements in intellectual achievements situations. *Child Development,* **38**, 765-776.

Loeb,R.C. 1975 Concomitants of boys' locus of control examined in parent-child interactions. *Developmental psychology,* **11**, 353-358.

前田基成・原野広太郎　1993　内潜的モデリングによる主張行動の形成に及ぼす自己効力感の効果　教育相談研究，**31**，19-27.

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子　1995　特性的自己効力感尺度の検討　教育心理学研究，**43**，306-314.

西平直喜　1983　青年心理学方法論　有斐閣

大野久　1996　発達（青年）心理学，人格心理学におけるAs a wholeを分析単位とする研究への提言　発達心理学研究，**7**，190-195.

Rotter,J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs,* **80**, 1-28.

坂野雄二・東條光彦　1986　一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み　行動療法研究，**12**，73-82.

Seligman,M.E.P. 1975 *Helplessness; On depression, development, and death.* San Francisco: W.H. Freeman.

Sherer, M., & Maddux, J.E., & Mercandante,B., & Prentice-Dunn, S., & Jacobs, B., & Rogers, R. W. 1982 The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports,* **51**, 663-671.

Stuifbergen,A.K., & Becker,H.A. 1994 Predictors of health-promoting lifestyles in persons with disabilities. *Research in Nursing and Health,* **17**, 3-13.

Tolor,A., & Jalowiec, J.E. 1968 Body boundary, parental attitudes, and internal-external expectancy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **32**, 206-209.

ホワイト，R.W.　中園正身訳　1985　自我のエネルギー　新曜社
(White,R.W. 1963 *Ego and Reality in Psychoanalytic Theory－A Proposal Regarding Independent Ego Energies.* Psychological Issues. Vol.3. New York: International Universities Press.)

Wichern,F., & Nowicki,S. 1976 Independence training practices and locus of control orientation in children and adolescents. *Developmental Psychology,* **12**, 77.